

## 特集「アーキテクチャ」の発刊によせて

村上拓史

近年ではIT産業を起点として、モジュール化やネットワークが組織のメタファーとなり、数々の流行語を生み出している。このような流行語のなかで、もっともよく耳にする言葉の一つがビジネス・コラボレーションであり、相互利益を生み出すために、ビジネスの活動とプロセスを別のビジネスと連携させることと定義されている。ビジネス・コラボレーションは、戦略的協調関係、アライアンス、B2B連携、サプライ・チェーン統合などを包括する用語である。IT産業においても同様で、システム・インテグレータはパートナーシップをより積極的に進めると公言し、ベンダーはパートナーシップの効果を後押しするようにアプリケーション・スイートの拡張を目指している。

ビジネス・コラボレーションは、経済的条件と技術的条件の急速な変化が活動とプロセスのより緊密な連携を通して相互利益の機会を生み出しているという共通の前提と、どうやって機会を現実化するかという似通った課題を持つ。企業間やビジネスユニット間で、組織がより一層コラボレーションすることは疑いなく、ネットワークが現在のビジネス行動を理解するためのメタファーであることは確実である。まだ不確実で、理解が充分でないことは、ネットワーク化されたコラボレイティブな行動の性質の変化と新しい傾向である。過去経験したように、ネットワークを構成するものの性質は時に連れて変化する。相互利益のために、企業がどのように共同するかという、コラボレーション、アライアンス、パートナーシップの適合モデルや特徴も変化している。ビジネス・コラボレーションとITの関係も、既存業務のITによる代替から、ITを補完財とした適用によって新たなケイパビリティを獲得することへ重点が移っている。

このように流動するユーザ側のニーズの本質と動向を理解し、専門的な技術的見識を持ってソリューションを立案し計画するのは、アーキテクトの役割とされている。ソフトウェアのうち、設計・開発と販売・適用が分離している流通ソフトウェアの場合、設計局面ではアーキテクトが、適用局面ではコンサルタントがニーズと技術を結びつける役割を持つ。顧客のアプリケーション開発では、二つの局面が連続しているため、人間とその目的からなる世界と技術の世界を結びつける役割は、アーキテクトに期待される。

『ユニシス技報』（以下、技報）では、MPUやネットワークなど電子技術の高速化と低廉化、および経済のグローバル化に伴うスピードとコストに対するプレッシャーの増加という状況の中で、顧客のアプリケーション開発を中心としたシステム・インテグレーション・サービスがビジネスとして成立するためにはシステム開発技術がどうあるべきか、という課題に取り組んできた。このような観点での特集は、「ソフトウェアは産業革命以来人間が創り出してきた最も複雑な構築物である」という言葉で始まる技報60号に端を発する。その技術は、プロジェクト・マネジメントへのプロセス・エンジニアリングの導入と、分散オブジェクト技術を活用

した開発技法が大きな柱と想定された。技報 60 号では、システム開発技術の成熟への期待をモデル化と仕様記述を中心として集めた。その後、プロジェクト・マネジメントに関しては技報 65 号と 67 号で、開発技法に関しては技報 63 号と 68 号で、技術の知識体系(Body of Knowledge) と実例を紹介した。

このような一連の流れの背景にあるインターネット技術は 2000 年にピークを迎え、次世代へとシフトしている。次世代の全容は未だ明らかではないが、その中心となる特性は、情報交換の自由度が飛躍的に高まることを背景とした、人間と人間とのコミュニケーションを媒介するものとしてのコンピュータ (Computer Mediated Communication:CMC) の役割の向上と捉えている。近年、サービス指向アーキテクチャを支える実装技術が登場しつつあり、CMC は業務アプリケーションのレベルにも浸透してきている。このような動向を技報 76 号と 78 号で特集した。

さてアプリケーションのプログラムは、時間、コスト、知識といった多大な投資の結晶であり、企業のシステム開発投資の大半は、既存のアプリケーションの機能追加や拡張である。モジュール化や分散オブジェクトは、相互作用点を少なくすることで、コードの部分的な変更の際に、全体のプログラムをスクラッチから書き直さずに、より簡単に変更できることを目指している。しかし、実際の既存アプリケーション自体は、モジュール化されていないか、長年の保守の中でモジュール化が崩れていることが多い。そして、最初からやり直すことは高価であり、改善されるという保障もない。さらにアプリケーション全体の再構想を実現するために既存コードを更改するうえで助けとなる方法論は (セキュア・プログラミングの領域で実用化されつつあるが) 未だ発展途上である。そこで最近のアーキテクチャ技術は、既存アプリケーションの書き換えを最小化した上で、緩やかな移行で、ビジネス・コラボレーションを実現できることを目指している。

今回の特集号は、このように次世代のインターネット技術が業務アプリケーションを融合する形で進む中、各種の技術を統合的に扱うための論考を集めている。システム・インテグレータはもとより、各企業において情報システム部門の方向を探る方々の参考になれば幸いである。

(ビジネスイノベーション本部テクノロジー・イノベーション・オフィス  
チーフイノベーションオフィサー (CINO))